

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：15501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2017

課題番号：15H06438

研究課題名(和文)外国人看護師に対する談話教育のためのコロケーション研究

研究課題名(英文)Analysis of Collocations to improve communication education for foreign nurses

研究代表者

永井 涼子(NAGAI, Ryoko)

山口大学・国際総合科学部・准教授

研究者番号：10598759

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、経済連携協定による外国人看護師受け入れに伴い彼らへの医療コミュニケーション教育が必要であるという社会的背景および、医療従事者による談話の研究が非常に少ないという学術的背景から、看護師が勤務交代時に行う引き継ぎ談話「申し送り」を対象に、医療談話特有の言い回しを明らかにし、外国人看護師への談話教育に役立つ基盤研究となることを目指すものである。本研究の結果、申し送りには医療界特有と思われる言い回しがあり、日常生活でよく使う動詞が医療界特有の使われ方をしていることなどが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes collocations in moshiokuri nurse reports. It aims to be a foundational study for teaching Japanese to foreign nurses, responding to the increased interest in medical Japanese in Japanese Language Education. Nurse reports use particular collocations of medical terms that are not found in the national nursing exams, but which are frequently used in professional environments. For example, when nurses report on administration of oxygen, they may use the phrase “ $\times \times$ ; itteimasu (= go)”, while a fever report may often contain the phrase “ $\times \times$  totteimasu (= take)”.

研究分野：談話分析

キーワード：医療コミュニケーション 専門日本語教育 医療談話 コロケーション

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初の社会的背景として、経済連携協定(以下、EPA)に基づき、インドネシア、フィリピンに続き、ベトナムからも看護師候補者が来日しているため、医療現場におけるコミュニケーションの現状を分析および記述することは急務であったということがある。

また学術的背景としては、医療コミュニケーション研究および医療分野における専門日本語教育研究の双方において、本研究の研究課題である医療用語のコロケーションに着目した研究はなく、それを解明する必要性と意義があった。

具体的に述べると、まず医療コミュニケーション研究分野については、The Roter Method of Interaction Process Analysis System (=RIAS)(Roter and Larson, 2001)に焦点を当てた Process Analysis や、会話分析(CA)と呼ばれる研究手法(Maynard, 2003)を用いる Microanalysis といったアプローチがある。これらの先行研究は主に医者と患者の談話を分析対象としており、医療従事者同士の談話を対象とした研究は管見の限り非常に少ない。具体的には医者が看護師に指示を出す談話を質的に分析した島田・小松・服部(2006)、婦人科での相互行為を扱った西阪・高木・川島(2008)などが挙げられるが、十分とはいえない。

次に医療の専門日本語教育研究分野についてであるが、当該分野において看護師同士の談話を扱っている研究としては本研究の研究代表者である永井の一連の研究がある。永井(2007)(2012)等、看護師が勤務交替時に行う「申し送り」と呼ばれる引き継ぎ談話の研究を進めてきた。また、2011年度～2013年度は「外国人看護師・介護福祉士候補者教育に向けた談話分析」(若手研究(B)課題番号 23720267)という研究題目のもと、日本人看護師および介護福祉士による談話データベースの作成および談話分析を行った。一連の研究の結果、看護師が勤務交替時に行う「申し送り」という引き継ぎ談話には、情報の流れという談話の型が存在しておりそれが情報伝達を円滑に進めるストラテジーとして機能していること、また報告者は報告を淡々と進めたい時と聞き手とのインタラクションを求める時をスピーチレベルシフトの利用により聞き手に伝えていることなどが明らかになった。また永井(2013)では談話分析の結果を踏まえた教材作成を行った。

これらの先行研究により談話の型が明らかになったことで、申し送りを「情報の流れを予測しながら聞く」ことが指導できるようになった。しかし、外国人看護師や新人医療従事者といった医療現場でのコミュニケーション経験が乏しい者にとっては、大まかな流れを知るだけでは不十分である。より詳細な内容が求められる。

このような社会的および学術的背景から、本研究では看護師が引き継ぎ談話「申し送り」内で使用する、習慣によってまとめて使われる語の連鎖(大曾・滝沢,2003、以下コロケーション)に着目し、分析を行うこととした。

## 2. 研究の目的

本研究では、医療現場で医療従事者間の実際に行われている、医療従事者固有の医療用語を用いた言い回しについて、言語コミュニケーション学の立場から調査、分析を行う。医療コミュニケーション研究では、医療者から患者への発話についての先行研究はあるが、医療従事者間については十分ではない。しかし EPA に基づき、インドネシア、フィリピンに続き、ベトナムからも看護師候補者が来日している今日、医療現場におけるコミュニケーションの現状を分析および記述することは急務である。本研究では、医療従事者間の報告談話を対象とし「医療現場特有の言い回し」を明らかにし、外国人看護師候補者に対する専門日本語教育、外国人看護師および日本人新人医療従事者の不確かなコミュニケーションによる医療事故の防止教育に援用することを目的とする。

本研究は以下の学術的な特徴および独創的な点を持つ。

- ・ 先行研究ではほとんど扱われていない医療従事者同士の談話(看護師談話)を対象とする。
- ・ 先行研究で明らかになった当該談話の型を語彙レベルまで詳細に分析し、専門日本語教育教材としてまとめる。
- ・ 直感や内省によって作成されている現在の医療の日本語教科書(黒羽・渡部,2006)とは異なり、実際の談話データから導かれた結果を用いるという実証的方法論を扱う。つまり、従来の内省に基づく方法では明らかにできなかった言語情報を用いるため、全く異なる性格の教材の基盤研究となりうる。
- ・ 現在のコロケーション研究は書きことばのコーパスを用いたものが多い中(スルダノヴィッチ,2013)話しことば、特に医療というジャンルに特化したコロケーション研究はない。

また、本研究の扱う範囲としては、医療従事者同士の談話の中でも、先行研究でも扱い、データベースを既に有している、看護師の引き継ぎ談話「申し送り」を対象とした。これまで収録した申し送りの談話の中からコロケーションを抽出し、医療用語のコロケーションとして談話内での使われ方などを分析して記述した。多数の病院データを使用して統計的に一般化するのではなく、特定の病院の申し送りでの言い回しをまとめ、一般語彙や国家試験内の語彙との関連性を分析しながら記述した。それにより、医療談話におけるコロケーション研究という一つの医療談

話研究の方法論を提示することも目的とする。

### 3. 研究の方法

既に録音済みの談話の文字化資料を用いた。関西地方の1つの内科系総合病院における申し送りの資料における語彙の使用状況を分析し、頻出語彙(主に名詞)を選定する。その際、申し送りは患者1人1人について情報をまとめて報告するため、報告者ごとではなく、患者ごとに頻出語彙を算出する。頻出語彙を選び出した後は、その語彙が実際にどのような述語(述部)と連動しているのかを分析し、そのコロケーションと使用状況を明らかにする。

さらに詳細に述べると、引き継ぎ談話で報告される項目の中でも、熱や血圧といったバイタルサインなどの情報、および投薬・酸素投与・点滴等の処置情報を伝えている発話を取り上げ、コロケーションを分析した。これは、バイタルサイン情報や処置情報は多くの患者に共通して報告される項目だからである。例えばバイタルサイン等の情報は73名中68名(93%)で言及される共通情報であり、処置情報は申し送りの談話構造の中の主要な項目となっている(永井,2012)。今回は談話数が少ない事例研究であるため、統計処理は行わず、手作業で数えた数値を使用して分析を行う。

コロケーションの分析においては、「格成分の名詞の意味的カテゴリーと述語成分のコロケーション」(野田,2007)を扱う。本研究の対象である共通情報や処置情報等多くの患者で言及される情報の発話では複文はほとんどなく(永井,2012)、副詞などもあまり使用されていないからである。野田(2007)はこのタイプのコロケーションについて、先行研究のように述語から格成分を分析するものだけでなく「この名詞は、こんな述語を取ることが多い」といった格成分の名詞から述語を見る研究が重要になるとしている。そこで本研究では格成分の名詞の意味的カテゴリーから述語成分を見る方法で分析を行う。

さらに、国立国語研究所のNINJAL-LWP for BCCWJ(以下NLB)を利用するなどして、語彙のコロケーションが医学界特有のものかどうかを検証する。最後に頻出語彙の国家試験の問題内での使用状況と比較し、談話特有の特徴かどうかを分析する。上述の分析を済ませた結果を整理し、談話における医療用語のコロケーションとしてまとめる。

具体的に実施した年度ごとに内容をまとめると、以下ようになる。なお、平成28年9月~平成29年8月は産前・産後休暇および育児休業取得のため、研究を中断していた。

<平成27年度>

・文字化資料の整理：既に文字起こしを行

っている資料を見直し、雑音等のため聞き取りにくく、文字起こしを保留している箇所について、聞き取り直しを再度行う。また、「せんせ」のように聞こえてきた音の通り記述している箇所については聞き直し、(=先生)のように本来の語彙を追記して検索に漏れないように準備を行った。

・頻出語彙の選び出し：文字化資料を患者ごとに分け、そこで使用されている語彙(名詞)を洗い出す。結果をエクセルシートに整理し、半数以上の患者で使用されている語彙を本研究の頻出語彙として選び出す。

・頻出語彙のコロケーションを明らかにする：頻出語彙が含まれる発話を抜きだし、頻出名詞がどの述語と連動するのかを分析する。そして頻出語彙が使われる典型的な文型を導き出す。その後活用まで含めて考察を行った。

<平成28年度：8月まで>

・頻出語彙のコロケーションを明らかにする：平成27年度に引き続き行った。

・コロケーションが医学界特有のものか検証する：国立国語研究所が開発したweb上のコーパス(BCCWJ)を利用し、頻出語彙のコロケーションが一般での使用状況と異なるのか、異なるとしたらどのように異なるのかを分析する(異なる場合は特に注意喚起が必要となるため)。(例：「点滴」...点滴を打つ(BCCWJ)、点滴がいつている(医療談話)) BCCWJは書きことばコーパスなのでその限界に留意した。

<平成29年度：9月から>

・コロケーションが談話特有のものか検証する：看護師国家試験の問題を利用し、頻出語彙の使用状況を分析する。比較分析を行い、本研究のコロケーションが談話特有のものなのか、あるいは書きことばでも共通するものなのかを明らかにする。

・研究成果の公開・発信

日本語教育方法研究会で発表した。ポスター発表を行い、実際の分析結果一覧表を見てもらい意見交換等も行った。また、関連する内容を医療福祉系の雑誌にも投稿した。

### 4. 研究成果

全体を通して看護師の申し送りには医療界特有と思われるコロケーションがいくつもあることが明らかになった。以下に申し送り談話の構成要素別(情報の種類別)に具体的に見ていく。

(1)

共通情報(多くの患者に共通して報告される項目)では、最も言及する割合が高い熱、血圧、パルスについて述べる。

熱について言及している箇所(1発話内に複数の箇所がある場合がある)は126ある。これらは発熱に関する箇所(40)と、熱の数値に関する箇所(86)に分けられる。発熱に

関する箇所では「熱が出た」「熱がある」というコロケーションが多く使われており、これはNLBでも同様である。一方で、発熱を「熱発(ねっぱつ)」と読み伝える発話もあった。「熱発」は「ない」とのみ共起し、10(25%)の発話で観察された。NLBでは「熱発」は「伴う」「持続する」と共起する例が挙げられており、「熱発がない」というコロケーションは示されていない。

また熱の数値に関する発話においては、「8度ある/出た」のように「ある」「出る」等の熱に関してよく使われる述語成分はあまりなく、体言止めが全体の44%の38箇所で見られた。

次に血圧であるが、血圧は80発話中76発話(95%)で数値とともに述べられている。そのうち、54%にあたる41発話は体言止めで伝達されている。次に11発話(15%)で「100台でとってます」のように「とる」と共起する形が観察された。NLBでは「上がる」「下がる」等が挙げられているが、体言止めや「とる」はほとんどない。申し送りでは「下がる」が1例あるのみであり、NLBとの違いが見られる。

次はパルス(酸素飽和度)であるが、基本的には%で述べられる。パルスの発話は70あったが、熱や血圧など他の数値と同様に、体言止めで表されているものが21例(30%)であった。その他は、「98%でとってます」のような「とる」(10例:14%)、「98%です」のような「です」(8例:11%)、「98%です」のような「いく」(7例:10%)などが挙げられる。NLBでは酸素飽和度を意味する「パルス」「酸素飽和度」の例はなかった。(2)

次に処置情報であるが、点滴については全34発話のうち、15発話(44%)が「点滴のほう、変わりなく、いってます」のように「いく」、8発話(20%)が「点滴、12時行使になってますのでお願いします」のように「行使になる」と共起するもので、この2つが大半を占めている。一方でNLBを見てみると、「点滴をする」「点滴を受ける」などが上位を占め、「点滴がいく」「点滴が行使になっている」等はない。

投薬については、「座薬」は「入れる」「操行する」等、薬の種類によって異なるものもあるが、全体的には「抗生剤、パンスポリンのほう、現在いってます」「風邪薬飲んでます」のような「いく」(22例:23%)「飲む」(23例:24%)が全体(95)の多くを占めている。NLBでも「薬を飲む」は最上位を占めているため、同じ傾向であるように見えるが、申し送りの中で「薬を飲む」というコロケーションが使われているのは6割が患者の言葉の引用や引用直後であり、看護師が報告をする際には「いく」の方が多く使用されている。ちなみにNLBでは「薬がいく」というコロケーションはない。

このように本研究では看護師の引き継ぎ

談話「申し送り」でよく言及される項目について、格成分の名詞の意味的カテゴリーと述語成分のコロケーションの分析を行った。その結果、申し送りでは数値を示す際は体言止めあるいは「(数値)でとる」と共起し、処置情報では「いく」と共起することが多いことが明らかになった。この結果についてNLBを使って一般的な日本語の使用傾向と比較したところ、ほとんど一致しなかった。このように医療談話には特有のコロケーションがあり、医療の専門日本語教育ではその点に留意する必要がある。

また、「いく」「とる」など初級レベルで学ぶ基本的な動詞が医療界では特有の意味で使用されていることが明らかになった。これは実際の教育現場での指導に役に立つ情報であると同時に、日本語の使用状況として今後分析を深める価値のある結果である。

#### <意義>

- ・ 熱や血圧といった多くの患者に共通して伝達される情報項目については、語彙のつながりだけでなく、文法情報(活用語尾など)も定型化したコロケーションが観察できる。

- ・ 明らかになった談話内の医療用語のコロケーションは、同じ語彙の国家試験内の使われ方と大きく異なる。

- ・ 明らかになった談話内の医療用語のコロケーションは、一般語彙の使われ方とも異なる。

- ・ 医療談話には特有のコロケーションが存在し、それが忙しい医療従事者が迅速かつ正確にコミュニケーションを行う一つのストラテジーとして機能している。

コロケーション研究において、「医療ジャンルの話しことばのコロケーション」という新しい結果を導きだせる。医療従事者が迅速かつ正確に情報を伝達する方法として、コロケーションを多用するというストラテジーを新たに提示することができる。

ハンドブックのような形でまとめることで、忙しい医療現場においても外国人および新人の指導に即時的に活用することができる。

#### <今後の展望>

今後はデータ、コロケーション数の拡充を行い医療コロケーションについてまとめる必要がある。また、それと同時に、看護師国家試験等の書きことばとの比較も行う必要がある。つまり、本研究で明らかになった医療界特有のコロケーションが談話特有のものか検証するのである。具体的には、看護師国家試験の問題を利用し、頻出語彙の使用状況を分析する。比較分析を行い、本研究のコロケーションが談話特有のものなのか、あるいは書きことばでも共通するものなのかを明らかにする。

#### <引用文献>

Roter, D. L. and Larson, S. (2001) The relationship between residents' and attending physicians' communication during primary care visits: an illustrative use of the Roter Interaction Analysis System. Health communication, 13-1, pp.33-48. London and New York: Routledge.

Maynard, D. W. (2003) Bad news, good news: conversational order in everyday talk and clinical settings. Chicago: University of Chicago Press. [櫻田美雄、岡田光弘訳 (2004) 『医療現場の会話分析：悪いニュースをどう伝えるか』 勁草書房]

島田 智織・小松 美穂子・服部 満生子 (2006) 『病院組織におけるコーディネーションの実際 - 指示出し・指示受けの会話分析から - 』 『茨城県立医療大学紀要』 11, pp.163-171, 茨城県立医療大学

西阪 仰・高木 智世・川島 理恵 (2008) 『テクノソサエティの現在 女性医療の会話分析』 文化書房博文社

永井涼子 (2007) 『看護師による「申し送り」会話の談話交替管理 - スタイルシフトを中心に - 』 『日本語教育』 135, pp.80-89

永井涼子 (2012) 『看護師による「申し送り」の談話構造』 『北研學刊』 8 号, pp.38-51

永井涼子 (2013) 『看護師談話の分析を応用した教材作成の試み 引き継ぎ報告 「申し送り」を対象に 』 『第 41 回日本語教育方法研究会会誌 20(2), 42-43

大曾美恵子・滝沢直宏 (2003) 『コーパスによる日本語教育の研究 - コロケーション及びその誤用を中心に - 』 『日本語学』 22, pp.234-244

黒羽千佳子・渡部真由美 (2006) 『看護師・介護福祉士候補者向け日本語コースおよび教材』 『公開シンポジウム 『専門日本語教育』 の最前線 配布資料』 5-1-5-13

スルダノヴィッチ・イレーナ (2013) 『大規模コーパスを用いた形容詞と名詞のコロケーションの記述的研究：日本語教育のための辞書作成 に向けて』 『国立国語研究所論集』 6, pp.135-161

野田尚史 (2007) 『文法的なコロケーションと意味的なコロケーション』 『日本語学』 vol.26, pp.18-27, 明治書院

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

永井涼子 (2018) 『看護師の「申し送り」談話におけるコロケーションの分析』 『日本語教育方法研究会誌』 24-2, pp.102-103, 査読無

永井涼子 (2018) 『外国人看護師・介護福祉士教育に向けた談話分析』 『地域ケアリング』 20-2, pp.60-63, 査読無

[学会発表](計 2 件)

永井涼子 (2018) 『看護師の「申し送り」談話におけるコロケーションの分析』 日本語教育方法研究会第 50 回研究会

永井涼子 (2018) 『看護師の「申し送り」談話におけるコロケーションの特徴』 竹園日本語教育研究会 (発表予定: 7 月)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

永井 涼子 (NAGAI, Ryoko)  
山口大学・国際総合科学部・准教授  
研究者番号：10598759

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )